山陽新聞
2018年(平成30年)3月7日 水曜日 社会 28

広がる善行チケット

岡山県内小中学校

望ましい行動「見える化」

1面から続く

「生徒の問題行動ばかりが目に付き、注意して改めさせようとしがちだった。だが、叱るだけでは伝わらないこともある。チケットによって褒めて伸ばす方向へ転換できると思った」

岡山市立福浜中の福田聡教諭は振り返る。2016年春、生徒の善行を教員がチケットに記して渡す活動を同校が取り入れた際、中心的な役割を担った。

〈黒板をピカピカにしてくれた〉〈配布物を配るのを手伝ってくれた〉

導入以来、教員は学校生活の中で垣間見える生徒たちの〝思いやり〟を7千回以上、チケットにしたためてきた。

2年の時まで休みがちだった3年男子はある日、掃除当番ではないのに進んで机を片付けた。何げない行動だったが、クラスメートが担任に伝え、チケットをもらった。その出来事もあって学校に足が向くようになり、友達と過ごす日々を楽しんでいる。

米国発祥

チケットは米国発祥の指導方法「PBIS」の運用ツールだ。栗原慎二・広島大大学院教授編著の「ポジティブな行動が増え、問題行動が激減！PBIS実践マニュアル&実践集」（ほんの森出版）によると「廊下を走らない」「授業中におしゃべりしない」といった否定的な指導ではない。「静かに歩く」「人の話を聞く」と望ましい行動を前向きな表現で具体的に示し、「見える化」するのがポイントだ。

米国では、もともと発達障害などの子どもへの特別支援教育向けに開発され、問題行動への科学的研究に基づいた効果的なアプローチとされている。

16年度調査で岡山県内の公立校の通常学級では、発達障害などで特別支援が必要とされる児童生徒の割合は中学校で8・2%、小学校では12・4%と、1学級（40人）当たり3～5人程度の割合だ。ほかにも、家庭環境などさまざまな事情により「コミュニケーションや行動面で困難を抱えている子どもは増えている」との声が教員から聞かれる。

個々に合わせ

指導に悩む教育現場にPBISを提唱する栗原教授は、一方で「単にチケットを使えばうまくいくわけではない」と指摘する。教員からは「褒める基準は？」との質問が多いというが、画一的な基準を設けるのではなく、児童生徒個々の状況に合わせ、それぞれの「小さな成長」を喜ぶ姿勢で臨むべきと助言する。

善行が「ご褒美（チケット）目当て」になるのではないか、との懸念もある。栗原教授は「当然考えられるが、それも望ましい行動の価値を理解していくためのプロセス」と説明。重要な点として「褒めて伸ばす」方針を教員全員が共有し、学校全体で取り組むことを挙げる。

岡山県内でいち早く、15年にチケットを導入した総社市立総社西中では教員間でも試みた。

〈困ったとき、『わしやるよ』と二つ返事で引き受けてくれる〉〈明るく元気をもらっている。スマイルがステキ〉

教員自身が褒められる喜びを実感し、活動の意義を共有する結果に結び付いたという。大山敬子校長は「単なる行動評価ではなく「良いことをしてくれた『あなた』にありがとうと伝える取り組み。誰かに必要とされることを幸せと感じる心を育みたい」と話している。

（民直弘）

必要とされる喜び育む

岡山市立福浜中の「Good Behaviorチケット」

校内落ち着き学力向上

「PBIS」に詳しい大阪教育大大学院の庭山和貴特任准教授（応用行動分析学）の話　昔も今も、一見厳しくても子どもたちに慕われる先生がいる。共通するのは、良くできたとき、褒めていること。自然と実践している教員は身近にいるはずで、PBISは全くの新しい取り組みではない。PBISを始めるに当たっては、学校でこうした実践を振り返り、成果を上げている方法を教員間で共有するのが近道になる。子どもが授業中に歩き回ったら教員は注意するだろう。しかし、注意を「先生に注目された」と受け止め、問題行動を繰り返すケースがある。むしろ、きちんと座って授業を受けているときに積極的に関わって褒めてほしい。一人一人の望ましい行動が増えれば、問題行動は当然減り、校内は落ち着き、学力の向上に結び付くと思う。